

【史料紹介】

『点石齋画報』に見える科挙関連記事——その一「威風堂々」

湯城吉信

はじめに

『点石齋画報』とは、イギリス人商人のアーネスト・メイジャーらが上海で経営していた申報館から一八八四年に創刊された画報である。一八九八年に終刊するまで、原則陰暦で毎月六のつく日に発売されていた（一回八図、全五二八号）。様々な絵師によって描かれた絵入り新聞であり、内容は、社会情勢や科学から世間での事件や妖怪等三面記事の内容まで多岐にわたるものであった。^(註)

『点石齋画報』の名は、申報館付設の印刷所「点石齋石印書局」に基づく（途中から申報館を離れる）。印刷所の「点石齋」は、直接的には点石が石印印刷技術を意

味することによるが、「石を点じて金と成す（点石成金）」という成語の含意もあろう。

「点石成金」は「点鉄成金」とも言い、もともとは、仙人が錬金術で石や鉄を黄金に変えたことを言い、後、「不十分な文章に手を入れて立派な文章にする」ことを意味するようになった。

『点石齋画報通検』によれば、『点石齋画報』には科挙関係の記事が二百十七則ある。筆者はその中、三十則ほどを取り上げ順次紹介していきたいと考えている。今回はその一回目として、六則を紹介したい。

隋代に始まり清朝まで続いた科挙は、一九〇五年についてその終わりを迎える。『点石齋画報』はちょうどその終焉期に刊行されており、科挙が行われている同時代

の記録として貴重である。『点石齋画報』はその画が高く評価されている。『点石齋画報』は写真ではなく、場面を正確に描写したものでなく、あくまで「イメージ図」であるが、当時の人がどのように認識していたかを知ることができる。

今回は、科挙の莊嚴さを伝える記事を六則紹介したい。実際の科挙の様子を伝えるのが目的なので主眼は画にある。①から⑥は試験が行われる順番に並べた。ただし、②と⑤は殿試（中央での最終試験）に関する記事であり、その他は郷試（各地方での試験）に関する記事である点に注意されたい。郷試は、地方の貢院（試験会場）で独房のような号舎に閉じ込められて行われた（参考画像2、3参照）。

以下、題名の後のカッコ内の年月日は、各記事の発行年月日である（『点石齋画報通検』による）。文章の後にある「閑章」とは印章の形で一言コメントを添えるものである（解説は『点石齋画報全文校点』による）。原文の句読点は、『点石齋画報全文校点』を参考に適宜改め、すべて日本式句読点に改めた。

【注】『点石齋画報』については、葉漢明、蔣英豪、黄永松編『点石齋画報通検』代序「『点石齋画報』与文化史研究」、馬光仁編『上海新聞史（一八五〇―一九四九）』第一章第六節三「『申報』館的五大附属出版物」が詳しい。

①「進呈題目」（問題を奉る）（戊集、大可堂版二一六四、一八八五・一〇・二三（光緒十一年乙酉科））

*順天府の様子。試験問題が御輿に載せて運ばれる様子。

*堂の軒下には「天開文運」の文字が見える。

【原文】順天為皇畿、故舉行鄉試、一切典禮較各直省尤為崇闕。題日本係欽定、將四書折一角、交軍機處傳送貢院。主考即於摺角之書頁内公同酌議、刊頒各號士子。其五經、詩、策等題、亦如之。每場放頭牌時、監臨官朝衣朝冠、將題目用黃緞封卷、高托至龍門口、恭置黃亭中、擡送軍機進呈御覽。鉅典煌々、懿歎鏗哉。

閑章「為國錄賢」

【大意】順天府（現北京市）は天子のお膝元であり、郷試を実施する際も、すべての儀式が他省に比べ盛大に執



り行われた。試験問題は天子により決定され、四書の一
角を折り、軍機処（皇帝直属の秘書機関）に渡され貢院

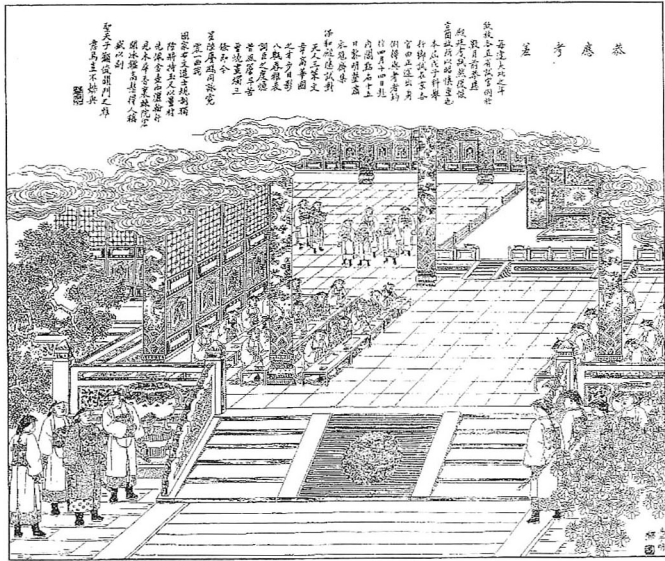
（試験場）に送られ、主任試験官らが折られた頁を合同で協議し、その後受験生へと配布された。五経や詩策などの問題も同様である。試験の度に、試験監督は正装し、問題を黄色い緞子で包み、高く掲げて宮門に持つていき、黄亭に置き、軍機処に運ばれて、皇帝の御覧に呈した。ああ、なんと盛大なことよ。

（国のために賢人を登用する）

【注】○放頭牌 科挙では、解答用紙を提出した受験生は、三十人ずつ退出した。最初に受験生を退出させることを「放頭牌」と称した。

【解説】王道成『科挙史話』五〇頁に「順天貢院全図」が見える（配置は参考画像４の広東貢院と同様である）。また、同書五六頁によれば、皇帝が試験問題を欽定したのは順天府だけである。なお、科挙は「三歳一挙」と言って、三年に一度行われた（子・卯・午・酉の年に郷試、丑・辰・未・戌の年に会試と殿試）。

②「恭応考差」（試験官拝命）（實集、大可堂版五・一六八、一八八・六・一五（戊子科））



*紫禁城の保和殿で行われた殿試の様子。
 *殿試の机は、馬金科主編『中国考試史文献集成』巻九
 (图片) (高等教育出版社、二〇〇三年) 一五〇頁に画像

が見える。裝飾が全くない極めて簡素な座卓である。

【原文】每逢大比之年、欽放各直省試官、例於數月前、恭應殿廷考試、然後候旨簡放、所以昭慎重也。本屆戊子科舉行鄉試、在京各官、由正途出身例得與考者、均於四月十四日赴內閣點名、十五日黎明整肅衣冠、齊集保和殿應試。對天人三策、文章高華國之才、步日影八軛、春雅表詞臣之度。憶昔風簷辛苦、曾燒畫燭三條、即今星陞廣颺、同詠霓裳一曲。我國家右文造士、規制獨隆。將持玉尺以量材、先佩金壺而灑翰。行見木犀香裏、棘院宏開、冰鑑高懸、得人稱盛、以副聖天子籲俊闢門之雅意焉。豈不懿與。 閑章「簡在帝心」

【大意】科挙の年になると、(試験の)数ヶ月前に各省の試験官が任命され、殿試に応じ、その後、御意を待つて選出される。これは慎重に選抜していることを示すためである。今回、光緒十四年(一八八八年)、郷試が実施され(戊子科)、在京の各官僚は、正式ルート(*会試乙丑科(一八八九年))で試験を受ける者は、全員、四月十四日に内閣で点呼を行い、十五日早朝に正装し、保和殿に集合し、試験を受けた。天子の策問に答えるのは、

文章に長けた国を担う人材、翰林院の役人となり、見事な上奏文を奉る（*美辞麗句を並べ、試験もしくは合格後の厳かな様子を頌える）。昔は苦勞して勉強し、今、このような光榮に預かっている。我が国が、文教を重んじ、嚴格に人材を選抜し、（*以下も美辞麗句を並べ、人材登用の様子を称える）天子様が賢人を選抜しようとする意にお答えするのである。なんとすばらしいことではないか。（「選抜は天子の御心のままに」）

【注】○正途 清代の官吏は、科挙を受験することにより登用される「正途」と、献金や功績により登用される「異途」があった。○天人三策 「漢書」「董仲舒伝」に、武帝が董仲舒を登用した際に、董仲舒が武帝に答えたと言われる策。儒教を重視することを述べた。○日影八軌 「花磚」は模様のある磚（レンガ）。唐代には（文芸を掌る）翰林院の建物の前には「花磚道」があり、学士は、太陽の影が五磚の所に来た時が仕事を始める時間になっていた。それに対し、李程は日影が八磚を過ぎてようやく登庁したので、人は彼を「八磚学士」と称した（唐・李肇「翰林志」「北廳前花磚道、冬中日及五磚爲入直之

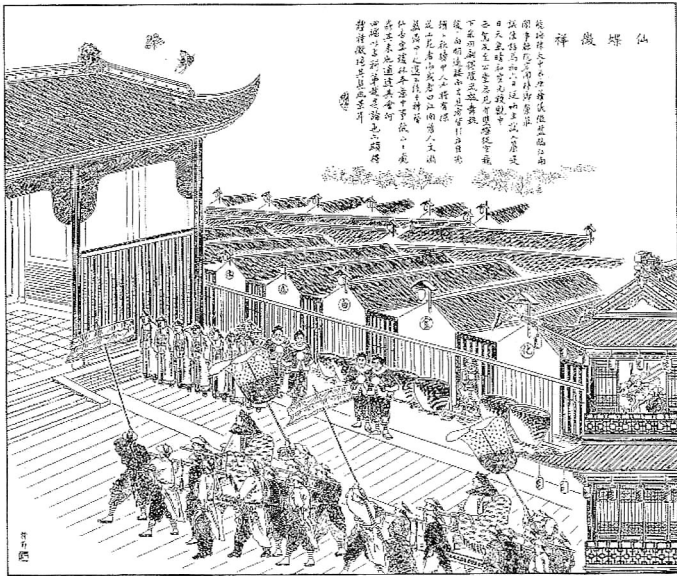
候。李程性懶好晚入、恆過八磚乃至。衆呼爲八磚學士。」。後、翰林院に就職することを「八花磚」と言うようになった。○詞臣 翰林など、文学で仕える臣下。

○風簷 科挙の試験会場を指す。○三條燭 唐代の科挙では、夜間は燭を三本だけ灯すことが許されたことを指す。○賡颺 「コウヨウ」。連続する様。○玉尺 人材を選び、詩文を評価する基準を喩える。○棘院 科挙の試験会場。古代の試験会場で、問題が起きないようにばらで囲んだことによる（『旧五代史』卷一二七「周書」十八「和凝伝」「貢院旧例、放榜之日、設棘於門及閉院門、以防下第不逞者」。○冰鑑 明察を喩える。○績俊 賢人を求める。○闢門 「書経」「舜典」の「闢四門、明四目、達四聰」（孔伝「開闢四方之門未開者、広致衆賢」に基づく。後、「闢門」で広く賢人を求めることを言う。

③「仙蝶徵祥」（吉兆の蝶）（卯集、大可堂版五一一四〇、一八八・二〇・一（戊子科））

*江南監考（試験総監）が威風堂々と貢院（試験会場）に入場する様子。

*先頭の試験官の団扇には「監臨」の文字が、二人目の団扇には「提調」の文字が見える。商衍鏗『清代科举考試述録及有関著作』によれば、郷試の場官は監臨がトツ



プでその下に監試と提調がいた(同書四四頁)。江南貢院の監臨は、江蘇、安徽巡撫が交代で担当した(同書一〇一頁)。試験会場の建物(屋根は切妻に描かれるが実際は片流れ屋根である)に見える文字は「千字文」(「鳴鳳在樹、白駒食場、化被草木、頼及万方」)に基づく。千字文が号舎の番号として使われていたのである。

【原文】皖撫陳大中丞、原籍儀徵、監臨江南闈事、棘院宏開、梓鄉榮蒞、誠佳話焉。初六日、送兩主試入簾。是日天氣晴和、雲光變黓。中丞駕及至公堂、忽見有雙蝶從空飛下、采羽翩躚、隨風飄舞、旋緩緩向明遠樓而去。見者皆引為佳兆、預卜秋榜中人、必將有探花上苑者。而或者曰、「江南為人文淵藪、鼎甲之選、不絕于科。簪仙杏、宴瓊林、本意中事。彼小小之飛蟲、其來也適逢其會、何必據以占科第哉。」是論也亦頗得體、特徵嫌其煞風景耳。

閑章「僂乎僂乎」

【大意】安徽省の巡撫陳大中丞は、本籍は儀徵であったが、江南の試験総監督となり、試験会場の門が開かれ、故郷に錦を飾ることができたのは、本当によい話だ。六日に、二人の試験総監督が試験会場にお入りになった。

この日、天気はうららかで、雲がたなびいていた。中丞が輿に乗って至公堂に着くと、突然、一對の蝶が空から下りてきた。美しい羽を風に随ってひらひらと羽ばたかせ、ゆつくりと明遠楼の方に去って行った。見た人はみな瑞祥だとし、秋の試験の合格者にはきつと探花（第三位、ここでは優秀な成績で合格する者を言うか）で皇帝にお目見えできる者があるだろうと言われた。一方、以下のように言う者もいた。江南は人材を輩出する土地であり、優秀な成績で合格する者は常にいる。合格不合格は宮廷内の事だ。このような虫が飛んできたのはたまたまなのに、どうして試験の予兆とできようか、と。この意見はすこぶるもつとだが、いさかか興ざめな（風流を解さない）点が残念だ（嫌いがある、惜しまれる）。

（「ひらひらひらひら」）

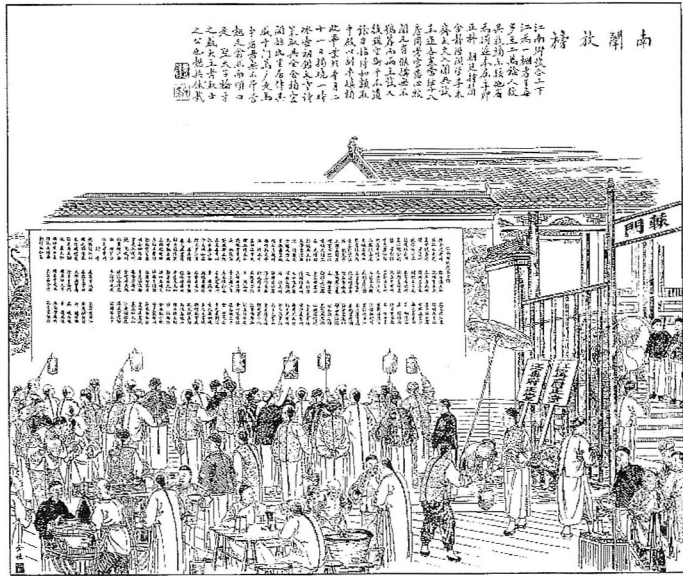
【注】○陳大中丞 陳彝（字は六舟、号は聽軒、一八一七～一八九〇）のこと（『清代職官年表』『巡撫年表』一七二八頁）。○入簾 科挙において、試験官が試験会場に入ることを「入簾」と言った。○至公堂 試験会場の大堂（参考画像2、4参照）。○明遠樓 至公堂の前に

ある高樓。不正が行われないように試験会場を監視した（参考画像2、4参照）。○鼎甲 科挙の状元（第一位）、榜眼（第二位）、探花（第三位）の総称。鼎が三本足なのに基づく。○探花 探花とは唐代の風習で最年少の進士二人が長安城中の名花を探して報告を行った故事に由来する。○簪仙杏宴瓊林 「桂林杏苑」は成語で、郷試と会試を指す。郷試は旧暦八月に行われ、合格したことを「折桂」と称し、一方、会試は旧暦三月に行われ、合格を「探杏」と称したことに基づく（『儒林外史』第四十二回「桂林杏苑、空成魂夢之遊（一本作「空辜拾芥之心」、又一本作「空多夢想之勞」）。虎鬪龍争、又見戰征之事。」）。

【解説】華々しい試験官の入場を描写するが、試験官は貢院に入ると審査が終了するまでここに閉じ込められた。

④「南闈放榜」（江南貢院の合格発表）（石集、大可堂版八、三二七、一八九一・一〇・二八（辛卯科））

*江南貢院の合格発表の様子。江南貢院は南京にあり、



中国最大の科挙試験場であった。合格発表は大きな省では、旧暦の九月五日頃行われた。
 *門には「轅門」、看板には「江寧府正堂」、合格掲示板

には「江南郷試題名全録」とあり、補欠も含め合格者名がちゃんと読めるように書かれている（【解説】参照）。
 *合格発表の掲示板の右には龍が、左には虎が描かれているため、この合格発表掲示板を「龍虎榜（略称「虎榜」）」と言った。発表日も寅や辰の日であった。

【原文】江南郷試、合上下江為一棚、考生每多至二萬餘人。故其放榜、亦較他省為獨遲。本屆辛卯正科、朝廷特簡金靜階閣學、李木齊太史、入闈典試。呈進各卷、當經十八房同考官悉心校閱、凡有傑構、無不鶻荐、而兩主試又復鑑空衡平、不遺餘力、始得如額取中、殿以副車。填榜既畢、業於本月二十一日揭曉。一時冰壺朗鑑、文章詩策取其全、金榜宏開、姓氏里居傳其盛。千門萬戶走馬爭看者、無不昂首翹足、翕然而頌曰、「是 聖天子掄才之盛大、主考取士之公也。」懿與休哉。

閑章「盡賜」「及第」

【大意】江南の郷試は、上江と下江（上江は安徽、下江は江蘇）を合わせて一つの試験会場とし、受験生は毎回、二万人余りに登った。そこで、合格発表は他省に比べて遅かった。今回、光緒十六年（一八九一年）の正科

(正式ルート)では、朝廷は金静階閣学・李木斎太史を選び、会場に入り試験を監督させた。解答用紙を進呈し、十八房の試験官による慎重な採点を経て、優れた答案があれば必ず推挙し、両監督官も公正に審査するのに余力なく、ようやく合格定員を満たし、最後に補欠を決めた。合格発表の掲示板を書き終え、すでに本月(九月)二十一日(*西暦十月二十三日)に合格発表した。

優秀な人材、優れた文章、詩、対策文(解答のこと)はみな取り上げられ、合格発表が行われると人々はその盛んな様子を称えた。大勢の見物人は、みな首を伸ばしつまま立ち、「天子様の人材採用は何と盛大で、試験官は何と公正なことよ」と称え合った。「みな合格を賜う」**【校勘】**○天子掄才之盛大、主考『全文校点』は「天子掄才之盛、大主考」と句読を切るが改めた。

【注】○一棚 一場。棚は「考棚」(試験ブース)(参考画像3参照)を指す。○放榜 合格発表。○鑑空衡平 公正に判断すること。○金静階 金保泰(字は忠甫)『清代職官年表』「郷試考官年表」二九八六頁。○李木斎 李盛鐸(字は椒微、号は木斎、一八五八〜一九三

五)。○鶚荐 賢人を推挙すること。漢・孔融「薦禰衡表」(『文選』卷三七)「鷲鳥累百、不如一鶚、使衡立朝、必有可觀」に基づく。○冰壺 氷を入れた玉壺。清廉なことの喩え。

【解説】画の合格者掲示板には、全百四十五名の合格者の氏名(附出身地)が書かれており、左には、補欠(「副榜」)二十二名の氏名(附出身地)が見える。筆者が、一八九一年一〇月二六日『申報』の合格者名簿と対照し確認したところ、これらの氏名は実際通りである。ただ、興味深いのは、一〇月二三日『申報』に見える合格者の速報は、記者が写し取り電報で送ったものであるため、所々に誤りがあることである。たとえ間違いがあろうとも速報が待ち望まれていたのであろう。なお、合格者の人数は、省の格により多寡があり、順天府が一番多く(順治二年(一六四五年)の数は二六八人)、貴州が最少(同上)の数は四〇名)であった(『大清会典事例』卷三四八「礼部・貢挙」)。

合格者名(附出身地)：孫多捷寿州、陳希濂元和、魏家驊(速報は「驟」に誤る)江寧、薛臨正武進、沈維賢華亭、陳樹屏望江、夏日琦(速報は



「瓊」に誤る）嘉定、王承藻（速報は「藩」蘇州、魯泮林懷（速報は「江」に誤る）寧、徐旭望江、李組紳武進、程輔輝太平、汪文溥常州）副榜（補欠）二鮑鳴謙池州、厲蓉青儀徵、沈宗奭鎮江、韓之錦懷寧、

（劉邦霖如臯）

〔参考画像〕

1, 「江南貢院

外東西轅門」

（商衍縈『清代

科舉考試述録及

有関著作』五一

頁）

*門には「西轅

門」の文字が見

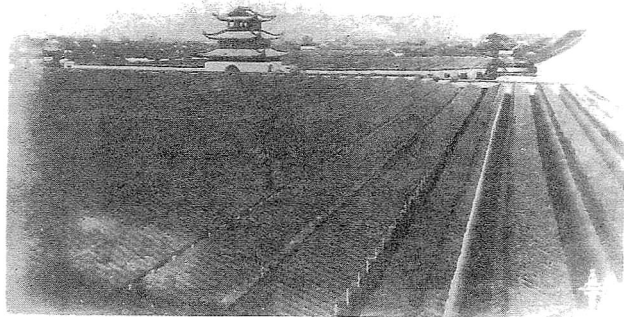
える。門の左右

には柵（柵欄）

が見える。『点

石齋画報』の図

はイメージ図な



がら、実際の様子
を反映している
ことがわかる。
る。

2, 「江南貢院」

（商衍縈『清代

科舉考試述録及

有関著作』五二

頁）

*左上に見える

高楼が明遠楼。

楼の東（奥にわ

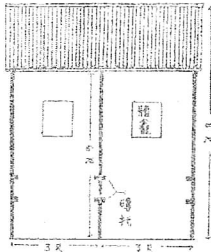
ずかに見える）

が東文場、西が

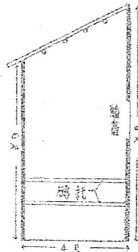
西文場（手前に大きく広がる）。明遠楼の北（左）に行

くと至公堂がある。

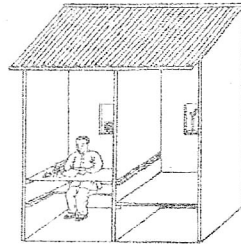
3, 「号舎の様子」(商衍鑾『清代科挙考試述録及有関著作』五五頁)



正面圖



側面圖

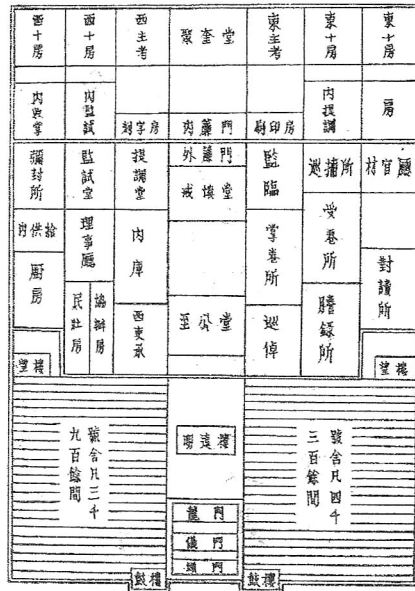


透視圖

*尺は营造尺(32cm)。幅が1m、奥行きが1m 30cmほどで、前面は壁がない。横に渡す板を差し替えて、昼間は机にし(透視図の左)、夜は寝床にしていた(透視図の右)。

4, 「広東貢院全図」(商衍鑾『清代科挙考試述録及有関著作』六二頁)

*他の貢院もおおむねこのようであつたであろう。



⑤「鼎甲游街」（状元様のお通り）（庚集、大可堂版三一六八、一八八六・六・二七（光緒十二年丙戌科））

*殿試の合格発表後、皇帝にお目見えした後、市中を練



り歩いた様子。なお、朝廷による合格者の祝賀会の様子は、「宴會盛儀」（大可堂版三一一九五）、「鹿鳴宴」（大可堂版八一二四五）に見える。

【原文】四月二十五日午前、三鼎甲應臚唱、由大内並轡出。插花披紅、導以旂傘、鼓樂迤邐、赴吏部文選司求賢科、登魁星閣、拈香行禮畢、乘馬至前門關帝廟、拈香行禮、旋由榜探送状元至其本省會館。此次狀頭係貴州人、貴州會館在櫻桃街、同鄉官設筵演劇以俟其歸。春風得意馬蹄疾、一日看徧長安花。自昔美談、於今勿替。

閑題「有命焉」

【大意】四月二十五日午前、三人のトップ合格者が皇帝との謁見を終え、宮中からいっしょに退出した。美しく着飾り、天蓋に導かれて、音楽を奏でながら、連綿とした行列で、吏部の文選司求賢科（文選司は官僚の人事異動を管轄する）に至り、魁星閣（文運を司る神）に詣で、お参りした後、馬に乗って前門の関帝廟（武神）にお参りし、その後、第二位第三位の榜眼、探花から、第一位の状元の順番で、出身省の会館を訪れた。今回のトップ合格者は貴州の人（趙以炯）であり、貴州の会館

は桜桃街にあった。同会館の同郷の役人は宴席を設け、演劇を用意して、その帰りを待った。(孟郊の詩に)春風に意を得て(合格して)馬は速く、一日で長安の花を全部見終えた(挨拶巡りを終えた)、という。その美風は今も健在である。(「これも運命の定めか」)

【注】○臚唱 殿試後の皇帝との謁見。○有命焉 『孟子』尽心下篇「孟子曰、口之於味也、目之於色也、耳之於聲也、鼻之於臭也、四肢之於安佚也、性也。有命焉、君子不謂性也。」○貴州人 趙以炯(一八五七〜一九〇七)のこと(『明清歷科進士題名録』二八四四頁)。歴史上初の貴州出身の状元であり、今も貴陽には彼の旧居が保存されている。後の二人は、鄒福保(一八五二〜一九一五)、馮煦(一八四二〜一九二七)とともに江蘇出身。○春風：孟郊「登科後」詩「昔日鯁鯁不足誇、今朝放蕩思無涯。春風得意馬蹄疾、一日看盡長安花。」(試験の結果発表のあった時の風である)春風に自分の目的を達して満足して、乗馬の足取りも軽く、(新たに進士となった者の恒例として)一日かけて長安の庭園の花を見まわり尽くした。)○前門闕帝廟 劉侗・于奕正「帝京

景物略」卷之三「城南内外」に記載がある(明の成祖永楽帝が蒙古王ベンヤシリを征伐した時、闕公が靈威をあらわし、砂塵煙霧の中で、常に軍隊を誘導したという逸話が見える)。内田道夫『北京風俗図譜』251-7「神前の器具(敬神器物)」にも紹介がある。この前門闕帝廟は、文化大革命の時、破壊されたようだ。

*「成祖北征本雅失理、經闊漚海、至鞏難河、擊敗阿魯台、勒名擒虜山。軍前每見沙濛霧霧中有神、前我軍驅、其中袍刀仗、貌色髻影、果然闕公也、獨所跨馬白。凱還、燕市先傳、車駕北發口、一居民所畜白馬、晨出、立庭中、不動不食、哺則喘汗、定乃食、回蹕則止。事聞、乃勅崇祀。」

⑥「占鰲迎兆」(合格を期して)(御集、大可堂版二二二九、一八九五・二・一〇)

*合格する前に合格祝いの行列をしている様子。個人による合格祝いの行列はおそらくこのようであったのだろう。

*看板には「狀元及第」「獨占鰲頭」の文字が見える。

【原文】俗稱狀元獨占鰲頭、此典闕然久矣。然世之喜吉祥者、每於燈彩中見之。正不獨王珪詩云、「雙鳳雲中扶



此は、江戸時代、東京の隅田川に架かる橋の風景を写したものである。橋の上には、多くの人々が集まり、祭りの準備や活動が行われている。橋の両側には、伝統的な日本建築が見え、周囲には木々が茂っている。この風景は、江戸時代の生活様式や祭りの文化をよく表している。

輦下、六鼈海上駕山來」也。江右某君、甲午科新孝廉也。積學能文、高視闊歩、有不可一世之概。自計今春將應禮部試、擬迎吉兆、以奪先聲、遂出家資、雇覓巧匠、

祭成狀元遊街故事、佐以鼈山、間以雜色燈彩、使人昇遊各處。燭光照耀、祭若明星。六街三市之間、觀者蟻集、以為未至上元、得觀燈景、群誇眼福不置。人有識其意者則曰、「此孝廉求名之念也。」若果朱衣暗點、人將群起而迎之、其如愚不可及何。習俗移人、賢者不免。吾於孝廉亦云。 閑章「功名」「心熱」

【大意】民間で状元（トップ合格者）のことを「鰲頭を独占する」と言う。この典礼が行われなくなつて久しい（解説参照）。だが、世の中で祝い事を好む者は、毎回、提灯祭りの中に見ることができると。まさに、王珪の詩に「つがいの鳳が雲の中から輿をかついで下り、六匹の鼈が海の上を山を載せてくる」と言うものである（上元の提灯の様子を詠った詩）。江右の某氏は、甲午科（一八九四年）の新たな合格者（孝廉）である。よく学を積み、上から目線で人を見、周りを馬鹿にしていた。今春、礼部の試験を受けようと思ひ、あらかじめ吉兆を迎えんとし、金を使って、職人を探し、「状元が町を練り歩く」故事の様子をなし、鼈の山も添えて、色とりどりの提灯も交え、人に担がせて、各地を歩かせた。提灯は

光り輝き、町中の人々が、見物に集まり、「上元（正月十五日の節句＝元宵）になっていないのに提灯を見られるとは」と称え合った。「ただ」孝廉がなぜ行つたかを知っている人は、「孝廉の功名心が強いのだ」と言った。もし、合格が予知されて、人々が大挙して迎えているとすれば、その愚は救いようがない（愚以外のなにもものもない）。習俗の影響を受けるのは賢者も免れがたいとはこの孝廉のことを言うのだろう。

（「功名心が強すぎる」）

【注】○燈彩 模様を描き飾り付けた提灯。○王珪詩「依韻恭和聖製上元觀燈」「雪銷華月滿仙臺、萬燭當樓寶扇開。雙鳳雲中扶輦下、六鷲海上駕山來。鑄宮春酒霑周宴、汾水秋風陋漢才。一曲昇平人盡樂、君王又進紫霞杯。」（『御選宋詩』卷四十六「七言律詩二」（『四庫全書』所収））○甲午 一八九四年。○不可一世 驕り高ぶること。○狀元遊街故事 柳先開という人物（実在は不明）が驕って試験前に街を練り歩いた故事を言うか。○六街三市 唐代の長安が左右に六街あったのに基づき、後世「六街三市」で市中の繁華街を指すようになった。

○朱衣暗點 歐陽修が試験を採点する時、自分の後に朱色の服を着た人がうなずいたと感じたことに合格させていたこと（明・陳耀文撰『天中記』卷三十八「主考」所引「侯鯖錄」）「歐陽修知貢舉日、每遇考試卷、坐後常覺一朱衣人時復點頭、然後其文入格、不爾則無復與考。：始疑侍吏、及回顧之、一無所見。因語其事於同列、爲之三嘆。嘗有句云「唯願朱衣一點頭。」」に基づき、後、科挙に合格することを「朱衣點頭」と言うようになった。

【解説】唐宋時代、宮殿前の階段には神龜である鰲の浮き彫りがあった。首席合格者は一人でその前に立つことができたことから、後、首席で合格することを「独占鰲頭」と呼ぶようになった。

参考文献

葉漢明、蔣英豪、黃永松編『点石齋画報通檢』
（香港・商務印書館、二〇〇七年）
葉漢明、蔣英豪、黃永松校点『点石齋画報全文校点』
（香港・商務印書館、二〇一四年）

馬光仁編『上海新聞史（一八五〇―一九四九）』

（復旦大学出版社、一九九六年）

錢美甫編『清代職官年表』

（中華書局、一九八六年）

王戎笙主編『中国考試史文献集成』卷六（清）

（高等教育出版社、二〇〇三年）

馬金科主編『中国考試史文献集成』卷九（圖片）

（高等教育出版社、二〇〇三年）

朱保炯、謝沛霖編『明清歷科進士題名錄』

（文海出版社〈近代中国史料叢刊統編第七十九輯〉、

一九八一年）

王道成『科挙史話』

（中華書局〈文史知識文庫〉、一九八八年）

商衍鏐『清代科挙考試述録及有関著作』

（百花文芸出版社、二〇〇四年）

李世愉『中国歴代科挙生掠影』

（瀋陽出版社、二〇〇五年）

翟国璋主編『中国科挙辞典』

（江西教育出版社、二〇〇六年）

月刊『しにか』一九九九年九月号

*「特集 科挙―官僚（エリート）への道・その栄光と挫折」がある。

（大修館書店、一九九九年）